

彦根りんご

平成の彦根りんご



彦根りんごは、滋賀県彦根市で栽培されていた重さ50g程度のワリンゴの一種です。彦根市では昔から、8月のお盆に精霊に供える果物として、欠くことのできない供物だったそうです。

江戸付武士だった石居泰次郎氏が故郷の彦根に戻り、金5両の借金をして、林檎苗木200本、桐の苗木150本を購入して農園を開いたのが1816（文化13）年のことです。それ以後、1930（昭和5）年頃まで栽培され、彦根りんごとして有名になりましたが、昭和の初めに東北や信州の西洋りんごが進出して来てからは衰退していったそうです。

それでも彦根市中藪町の八木原太郎作氏は、最後まで保存に尽力されましたが、1955（昭和30）年頃には彦根で栽培されているものはすべて枯れてしまったようです。

この途絶えた彦根りんごの復活を目指している人々が集まり、2003（平成15）年6月に「彦根りんごを復活する会」を設立しました。そして長野、東北のりんご研究機関などを含めた全国各地から、ワリンゴを譲り受けてはマルバカイドウの台木に接ぎ木して圃場に植え、何年か後に果実が採取できたとき、昔の彦根りんごに一番近い形質をもったものを選択し、平成の彦根りんごとして復活させようと考えました。絶滅品種を復活させることで先人達の歴史や文化を学び、地域活性化や産業育成を考えようとするものです。また、前述のように、彦根にりんご農園が開設されてから200年後に当たる2016年には、「幻の彦根りんご復活二百年祭」のイベントを行うことを目標にしているそうです。

しかし、「本当の彦根りんご」はすでに絶滅して見ることはできませんので、このりんごに関する情報は70歳以上の古老の記憶と、岡島正夫画伯（号は徽州）が描いた水彩画（文献1）が頼りです。この絵は、終戦後、八木原太郎作氏邸内で、結実した彦根りんごを写生したもので、画伯によれば、この写生画は実物大に、形も色も何の誇張もなく描写したとのことのお話だそうです。

「彦根りんごを復活する会」では、古老の意見を聞いたり、上述の水彩画と比較した

りしながら選抜を進めていきました。広い圃場には、研究のため他数の品種が植えられており、**ワリンゴ**の研究農園のようだという事です。また、嘉田由紀子滋賀県知事や獅山向洋彦根市長が植えられた記念植樹もあります。

近年、ようやく水彩画とよく類似した果実をつける個体を選別・収穫できたということで。いわば、平成の彦根りんごができたわけです。

2007（平成19）年9月1日の毎日新聞などに”彦根市内で五十余年前まで栽培された「彦根りんご」の復活に取り組む市民グループ「彦根りんごを復活する会」の会長らが31日、収穫したばかりの「平成の彦根りんご」を同市役所に持参、市山向洋市長が試食し、「彦根の新しい名物に」と話が弾んだ”とあります。

彦根りんごの収穫は、8月初旬からできるそうですが、完熟するのは8月中旬（お盆の頃）だということです。果形や大きさは**ワリンゴ**そっくりです。尊側の窪みに、小さい庇のような淡色の膨らみ（多くて5個、あまり目立たない果実もある）があるのまでも似ていますが、果皮の色が違います。また、雨にあたると、果皮に、裂け目が入ることが多いそうで、その点も違うのでしょうか。そして味は彦根りんごの方が、**ワリンゴ**より良いような気がするのですが…。

2009（平成21）年2月に、大鰐町の活性化を目指した組織「OH！！鰐元気隊」のメンバーが彦根市を視察に訪れたのを契機に、交流が始まり、大鰐町に彦根りんごを植え、彦根市と大鰐町がりんごを通じての末永い交際と地域興しをすることになりました。

そのため、2010（平成22）年4月24日、滋賀県彦根市の「彦根りんごを復活する会」のメンバー8人と狂言師2人が、自動車にりんご苗木を積んで、遠路はるばる、大鰐町を訪れ、大鰐町に**和りんご**の品種である**彦根りんご**の苗木20本を寄贈しました。

寄贈された苗木は、大鰐町地域交流センター「鰐come（わにかむ）」の玄関前に、鉢植えで5本、町内の農園で3本、残りの12本は、大鰐小学校構内の空き地に子供たちの手によって植えられました。その際、関係者が集まり、植樹祭が行われました。

植樹祭で、彦根りんごを復活する会の八木原俊長会長（第2代会長）は、

「日本一のりんごの生産地に、和りんごというものをもってきました。これは、平安時代に中国からもたらされたとされる、ピンポン玉くらいの小さな実をつけるりんごで、薬にしたり、仏さまへのお供え物にするなど、日本各地で大切にされてきました。西洋りんごが日本に導入される前には、全国各地で栽培され、その土地にちなんだ名前と呼ばれたりなどしています。青森県でも、以前は大切な果物としてたくさん作られていました。

先人達がこのように大切にした果物を覚えておいていただこうと、私たちは『日本和りんごの会』を立ち上げ、和りんごを再び日本全国に広めて行きたいと思っています。

縁があつて、平成18年から、青森県にお邪魔し、りんごの勉強をさせていただいています。その勉強の結果をこういう形で皆様にお返ししたいと思います。きっと、記憶に残るかわいらしいりんごができて、心の中で誇らしい、いい思い出ができると信じています。

どうぞ、このりんごを大切に育てていって下さい。」という意味のご挨拶をなさいました。

2007（平成19）年9月13日。「彦根りんごを復活する会」の会長さん・副会長さんなどが、研究調査のために青森県りんご試験場を訪れた際に、青森市でお会いする機会に恵まれ、その際、貴重な「彦根りんご」果実を頂きました。また、花の写真をメール添付資料として、葉は郵送して下さいました。その後、折にふれて、いろいろと会員用のグッズを頂きました。その一部を写真にしました。

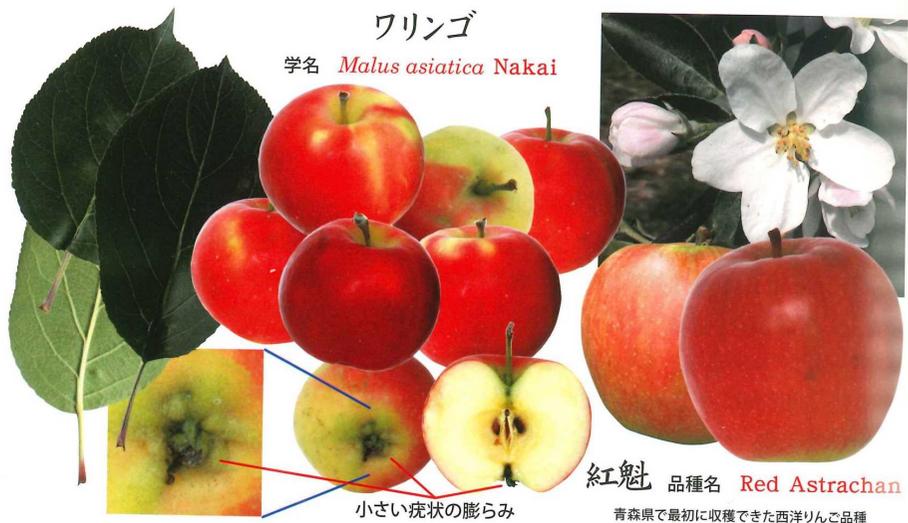


参考資料

青森県のりんご 改訂版 杉山芬・杉山雍著 (2015) 青森県りんご協会 P305～307

ワリンゴ・リンキ・リンキン

りんごは、平安時代か、鎌倉時代に、中国から日本に移入されたと言われています。日本各地で、いろいろな系統に分化したようですが、明治以降に欧米から移入されたいわゆる西洋りんごとは大きい違いがありましたので、当時の関係者は、日本在来のりんごを「林檎」欧米から移入されたいわゆる西洋りんごを「華果」と呼んで区別しようとしたのですが、今では、そのような言葉による区別はなくなりました。しかし、世界共通のリンネ式の植物分類が普及し、中国や日本に広く分布するChinese Pearleaf Crabappleに、ワリンゴという標準和名と、*Malus asiatica* Nakaiという、ラテン語の学名が付けられました。



青森県内では、8月のお盆直前に、仏前に供えるため、下図のような小さい青りんごが市場にでます。日本にあった古い系統のリンゴの仲間が、まだ細々と栽培されているのでしょうか。

疑問に思いましたので、調べてみたら、**リンキ**というリンゴが青森県七戸町にある「独立行政法人種苗管理センター上北農場」にあることがわかりましたので、訪問して、**リンキ**という名前で系統保存されている2種類のリンゴを見せていただきました。

それが次の写真です。



ここで分かったことは、上北農場に保存されている**リンキ**は、ワリンゴの変種に位置づけられ、さらにおのおのが品種に分類されていることです。ですから、**ワリンゴ**と呼ばれるものでも、変種の違い、品種の違いといろいろと変異が多く、熟期も果形も果色もそして葉にも、いろいろな変異があるようです。

仏前に供えるために、**リンキン**、**りんきん**などとして売られている円形ないし扇円形のりんごは、県りんご試験場と弘前市りんご公園に栽植されているワリンゴの未熟果実や上北農場のワリンゴ変種**リンキ**（北農試）の果実（観察時には未熟でした）と酷似していることは確かです。また、上北農場のワリンゴ変種**リンキ**（青り試）は、ヒメリンゴ（308ページ参照）ともよく似ています。

しかし、リンゴ属の分類は、素人の私どもには手に負えませんので、「ここにこんなものがありましたよ」と、事実をありのままお伝えするだけにしておきたいと思います。このことについて詳しいことを知っておられる方はご教示下さい。

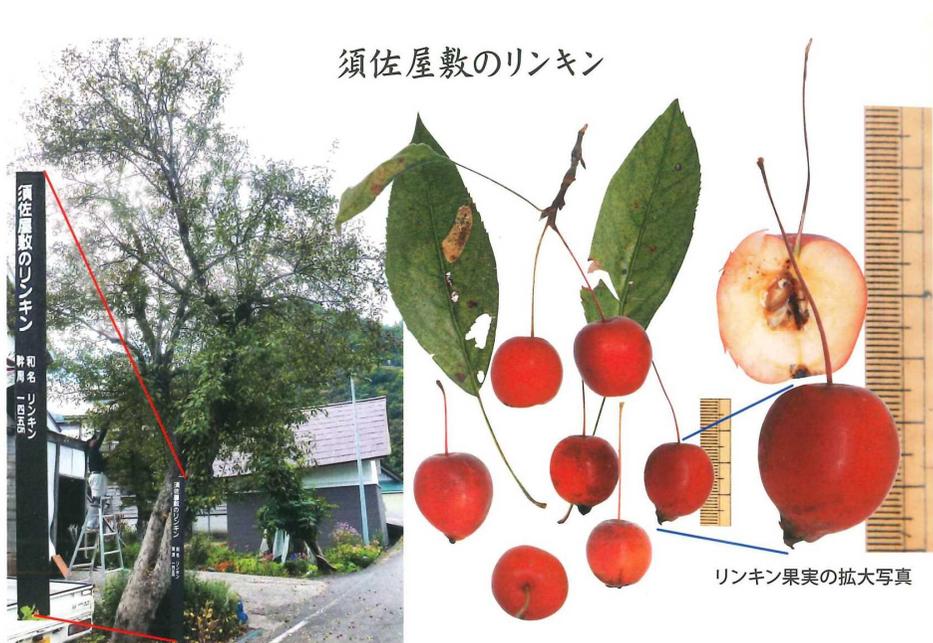
明治以降に、特定の地域Aで使われている名称を参考にして、学者が学問的名称を仮に「Aりんご」としたとしても、別の地域Bで類似の**リンゴ**が生活用語として**リンキン**という名前で呼ばれていれば、地域Bの古くからの行事に登場するリンゴは**リンキン**と呼ばれるはずです。

日本で、昔から栽培されていたリンゴに、**加賀りんご**、**高坂りんご**、**川上りんき**、**彦根りんご**、**りんきん**、**りんき**など、各地に固有品種や呼び名が残っています。また、観賞樹の**ウケザキカイドウ**（ベニリンゴ）の

学名の変種名にも「rinki」とありますので、この仲間はリンキとも呼ばれていたようです。これらのリンゴは、西洋りんごが移入されるまでは、地域ごとに生活に密着し、皆に愛でられていたものだったのでしょう。

郡山市の方から、福島県大沼郡金山町の須佐家の前に、大きいリンキンの樹があるということを教えていただきましたので、2013年10月9日に取材をしてきました。

次の写真は、そのリンキンの樹と果実、果実の近くについていた葉です。太い幹の左側で、脚立に登って果実を採ってくださっているご主人の大きさと比べてください。とても大きな樹だご理解いただけたと思います。ご主人からは、いろいろと親切にいただきました。ありがとうございました。



かつて、福島県の地域づくりサポート事業の支援をうけて、金山町では、町中の古木を紹介しようと、町内のヤマナシ、スモモ、ウメ、リンキンなどの古木に、案内板がたてられたそうです。この老木にも、ご覧のような、高さ2mの黒地に白い字で須佐屋敷のリンキンと記された立派な案内板が設置されていました。

樹高約9m、目通り周（地上1.2mの樹木の幹周りの長さ）が150cm（直径に換算すると約48cm）の、堂々とした古木です。

須佐家のご主人が、小さい時から大きな樹だったそうで、樹齢については、わからないということです。地上からは、実のなっている枝に手が届きませんので、上の写真にあるように、ご主人が、脚立に登って果実をとってくださいました。

その果実は、直径・長さが2~ 3cm程度、円形~ 円錐形で、重さ8~ 15g程度の、赤く色付く果実です。サクランボ程度の大きさと思って下さい。果実の尊の付近に、症状の・さいふくらみが見られます。

須佐家のご主人も、子供の頃には食べたそうですが、今は、誰も食べないとのこと。試しに食べてみました。多汁で淡褐色がかかった黄色の果肉で、甘みが少なく、酸が強いりんごです。料理用に結構な、おいしい酸っぱさです。苦味や渋みはありません。

まだ、花は見えていませんが、果実や葉の形と大きさ、果肉の色や味など、どれをとってもヒメリンゴ(308ページ参照)とよく似ています。

ワリンゴの学名を、*Malus asiatica*、ではなく*Malus prunifolia var. dulcissima*(ヒメリンゴの変種という意味)と記述している図鑑もありますから、この仲間の変異とその詳細な類縁関係をはっきりさせるのはかなり難しいことのようにです。

西洋りんごが導入される前から日本で栽培されていたいろいろな系統のリンゴが、リンキンやリンキとして、どこかで細々と栽培され続けているものと思われます。

参考資料

青森県のりんご 改訂版 杉山芬・杉山雍著(2015) 青森県りんご協会 P318~321